

# ナチュラルキス+ 4

*Keishi e Saboko*

---

風

*fuu*

*termity*



エタニティ文庫

## C o n t e n t s

ナチュラルキス<sup>+</sup><sub>plus</sub> 4                    5  
～ side Keishi ～

確実な未来                            289

ナチュラルキス<sub>plus</sub> 4

～ side Keishi ～

## 1 癒しの手

遠くのほうでボタンという音がし、佐原啓史はハツとして瞼を開けた。  
いま、何時だ？

起き上がろうとしたが、頭をガツンと殴られたような痛みにも襲われ、顔をしかめて動きを止める。

ガンガンガンと、まるで頭の中で掘削工事でも始まったような感じた。

頭痛と戦いながらそっと目を開いた啓史は、周囲を見回してここがどこだか思いださうとした。

そうだった。飯沢の家に泊まったんだったな。

ここは彼の親友、飯沢敦の部屋だ。ベッドには敦が寝ていると思われるふくらみがあり、微かに寝息が聞こえる。

啓史は敦の目覚まし時計に目をやり、時間を確かめた。

六時過ぎか……

自分の家ならば、すでに起きていなければならぬ時間だが、敦の家なら、まだ起きるには早すぎる。助かったと思っただが、よくよく考えてみれば、敦のところで飲んだせいではこんな頭痛を食らっているのだ。

昨夜、仕事から帰ってきた敦の父親が、焼酎の瓶を抱えて、飲み会に無理やり参加してきた。明日は仕事だから、とやわらかく断ったのだが、敦の父親はそれを豪快に笑い飛ばした。すでに、充分すぎるほどビールを飲んでいたというのに……

敦が酔った勢いで、啓史が結婚するということをばらしてしまい、俄然調子づいた敦の父に、さんざん飲まされるハメになったのだ。

いったい、どれだけ飲んだんだろうな？

だが、寝たのはそんなに遅くなかったはずだ。はつきり覚えてはいないが、おそらく十二時を回るか回らないかの時刻だったような気がする。

ガンガンガンと鳴り止むことなく痛みを訴える頭にうんざりしつつ、啓史は額に手のひらを当てた。

やれやれ……だ。

啓史は目を閉じ、頭痛が魔法のように消えてくれるのを願いつつ、小半時ほど待った。  
「うおおっ」

雄叫びのような喚きとともに、敦が起き上がった。が、すぐにどざりとベッドに倒れ

込む。

「あ、頭が割れるう〜」

悲鳴をあげながら、敦はベッドの上を転げ回り始めた。敦のせいで、啓史の頭はさらに大打撃を食らった。

こ、この馬鹿……頭が痛いなら、おとなしくしてりゃいいんだ。

愚かな友のせいで、さらにひどくなつた頭痛に顔を歪める。

「うるせえぞ！」

苛立ちから思わず敦を怒鳴りつけたが、そのせいでますます強烈な頭痛を招いてしまひ、啓史は激しく後悔した。

「くそつ、親父の野郎。無理やり飲ませっから……仕事だつてのに……」

強気な台詞とは裏腹に、敦は彼らしくない情けない声色でぶつぶつ文句を垂れる。啓史は他人事ではないのに、笑いが込み上げた。自分と同じ被害に遭っている者がいるとわかつて、気のせいか痛みがやわらいだように感じる。むっくりと身体を起こした啓史は、まだベッドの上で喚いている敦を置き去りにして、顔を洗いに行った。

「お前、俺と同じだけ飲んだよな？」

いまだ治まらない頭痛のことを考えないようにしつつも、着々と身支度を進めている

啓史に、敦はさも面白くなさそうに問いかける。

「まあな」

「二日酔いじゃないのかよ？」

ああ、と答えてやりたいところだったが……

啓史は身支度の手をいったん止め、ゆっくりと振り返った。

「喜べ、お前と同じ目に遭つてるさ」

その返事は、ひどく敦を喜ばせたらしい。頭痛が治まったわけではないのだろうが、敦もようやく起き上がり、顔を洗いに部屋から出ていった。

「お邪魔しました。また寄せていただきます」

啓史は頭の痛みを極力顔に出さないよう、見送りに出てきてくれた敦の母に、なんとか笑顔で挨拶した。

「ちよつとお、佐原君、結婚するんですつて？　なんでおばさんに教えてくれないのよお」敦の母が顔をしかめて言う。敦の父から話が伝わったのだろう。

「すみません」

「ねえねえ、どんな子なの？　佐原君の奥さんになるひとなら、綺麗なひとなんでしょうねえ」

結婚する相手のことを聞かれ、照れくささ以上に複雑な感情が湧き起こる。なぜなら、この結婚話、かなり突飛な状況から持ち上がったものだからだ。

相手は、榎原沙帆子という、啓史が副担任をしている生徒。沙帆子の両親が遠方に引越すことになり、ここを離れたくないと言う彼女から啓史は相談を受けた。それで引越さずに済むように沙帆子の両親に頼みに行ったら……なぜか彼女と結婚することになったのだ。

元より沙帆子のことが好きで、彼女を手に入れたくて仕方なかった啓史にとっては、ありえないような幸運が舞い込んできたわけで、彼はあと先考えずにその話に飛びついた。もちろん冷静になったあとは、こんな現実離れた結婚話など、すぐに立ち消えになると思っていたのだが……依然どういうわけか、式に向けて、着々と準備は進んでいるわけで……

「そりゃあもう、綺麗で可愛いひとだったぜ」

「家にも来てくださったらしいじゃないの。もう、おばさん残念で……。ねえ、今度また連れてきて紹介してちょうだいよ」

「はい。いづれ」

「それで、ほんとのほんとに二週間後なの、結婚式？ ああ招待状が本物だったなんてもうびっくりよ。この子ときたら、偽物だなんて嘘つくことないのに……」

敦の母はブツブツ言いながら、息子を睨む。

啓史は敦に、どういうことだ、と視線を向けたが、敦は誤魔化すような笑みを浮かべて頭をかく。

「そうそう佐原君、はい、これ」

袋を差し出されて受け取る。

「朝ごはんいらなくて言うから、お弁当にしておいたわ。お昼のぶんもあるから」

「いつもすみません。助かります」

啓史は感謝の意を込めてお礼を言った。

沙帆子の手作り弁当があるとはいえ、こういう気遣いはやはり嬉しいものだ。

「それじゃ」

「はい。いつてらっしゃい。またいらっしゃいね」

「佐原、またな」

そう言った敦の表情は、何かよからぬ企みを抱いているように感じられた。

啓史は顔をしかめつつ、飯沢家をあとにした。

運転中は集中しているせいか、さほど頭痛に苦しめられることはなかった。だが、学校の自分の部屋に辿り着くと、痛みは倍ほども増した。

「あー、やっつらんねえ……」

ぶつくさ言いながらエアコンを入れる。

さらにポットの中の水の量を確かめてスイッチを入れた啓史は、ズキズキする痛みに耐えつつ、窓に歩み寄っていった。鍵を開けながら沙帆子の姿がないかと窺う。

まだ早いから……さっさとくりゃいいのに……

啓史は胸の内で文句を垂れながら、ソファに倒れ込むようにして横たわった。

数分たった頃、窓をノックする音が聞こえ、彼は身体を少しだけ起こして窓に目を向けた。

笑みを浮かべた沙帆子がいた。頭痛は相変わらずだが、胸が弾む。

「おはようございま〜す」

窓を開けた沙帆子の挨拶に領いたせいで、ズンと突くような痛みを襲われる。

啓史は呻きながら、こめかみを押さえた。

「お茶、買ってきましたけど……」

啓史の反応に、沙帆子は戸惑ったような表情をしつつも、ペットボトルを持ち上げてみせる。

「先生？」

「入ってこい」

そう口にして後悔した。自分の声が耐えられないほど頭に響く。

「ひとりじゃ、入れませんよ」

「嘘つくな。入ったことあるだろ」

できるものなら手を貸したいが、なにせ身体がいうことを聞いてくれない。

「でも、ここ、よじ登るの大変なんですよ。荷物もあるし……」

荷物か……仕方がないな……

啓史はため息をつき、ゆっくり身体を起こして立ち上がった。

押し問答を繰り返すより、頭痛を我慢してでも、さっさと沙帆子に手を貸してやったほうが良さそうだ。

「ほら」

手を差し出すと、沙帆子はペットボトルと荷物をよこしてきた。受け取ったものを、テーブルに置いて、また窓の側に戻る。

今度は自分を抱き上げてもらおうと、沙帆子が両手を伸ばしてくる。素直に抱き上げてやればいいものを、あまのじゃくな性格がそれを邪魔する。

「先生？」

啓史が一向に抱き上げてやらないものだから、沙帆子は訝しそうに呼びかけてきた。

「ほら、荷物はもうないぞ。早く入ってこい」

「どうして手を貸してくれないんですか？」

「お前がよじ登るのを眺めていたいから」

啓史は正直に答えた。

「はあゝ」

沙帆子の責めと呆れの混じった叫びを食らい、頭がズクンと痛む。たとえ好きな女であつても、いまは寛大かんたに振る舞えない。

「早く入ってこい。俺は今日、辛抱がきかないぞ！」

自分の言葉に笑えた。ならば、さっさと沙帆子を部屋に入れてやればいいものを……

「こんな意地悪して、何が楽しいんですか？」

俺が聞きたいよ……

「憂うれさ晴らし。コーヒー飲むか？」

沙帆子の甲高い声が、啓史の頭の芯を貫いた。そのせいで頭痛が、やばいほど酷くなった。

啓史は少しよたつきながら踵かかとを返し、コーヒーの準備を始めた。苦いコーヒーでも飲めば、いまよりは頭がしゃっきりするかもしれない。ついでに、この頭痛もコーヒーの苦味が吸い取ってくれないものだろうか？ せっかく沙帆子と一緒にいるというの

に……

コーヒーを淹いれ終え、カップを手に沙帆子の様子を確かめようと窓に目を向けた啓史は、思わず「ほお」と声を上げた。窓枠までなんとか自力で這はい上がった彼女の姿は、かなりの見物だった。

「朝から、ずいぶんといいもん見せてもらったな」

淹れたばかりのコーヒーを一口飲み、啓史ははまだ窓枠の上にいる沙帆子に言った。コーヒーの苦味が効いたのか、頭痛も治まったように感じる。

ほっとしつつソファに座り込んだ瞬間、また刺すような痛みに襲われ、啓史は呻うめいた。「ど、どうかしたんですか？」

沙帆子の声が、頭痛に追い討ちをかける。

啓史は痛みを食らわれないよう、ゆっくりと首を横に振った。

「先生？ もしかして、頭が痛むんですか？」

凶星を指された啓史は、むっとして沙帆子を睨みつけた。

「わたしのせいじゃありませんからね」

自分を庇うように言う沙帆子を鋭く見つめる。

「いつまで、そこにいるつもりだ。早く降りてこい」

啓史の言葉に、沙帆子は遠慮することなく、窓枠から飛び降りた。



ドンという着地の音が脳天を突き上げ、啓史は情けなく「ううっ」と、呻く。

「こ、この野郎！」

「お、お前……俺を殺す気か？」

啓史は痛みへのたうちながら言った。

「お、大袈裟ですよお」

沙帆子の台詞にむかっときたが、いまの衝撃のせいで、啓史は反論する気力を失っていた。

「先生、大丈夫ですか？ 鎮痛剤とか、飲みました？」

「そんなもの飲んだって効かない。おい、こっち来い」

薬を飲んで治るもんなら、とつくの昔に飲んでるってんだ。

近づいてきた沙帆子を、啓史は睨みつけた。

「普通、婚約者が臥せてんを見たら、心配して看病しようとするもんじゃないのか？」

そう文句を言い、頭痛が鎮まることを期待してコーヒーをゆっくり飲み込む。

「何をすればいいんですか？」

その言葉は、啓史の痼に障った。威圧するように睨むと、恐れをなしたかのよう沙帆子が身を竦める。

「な、なんですか？」

「病人に、そういうこと聞くか？」

「それじゃ……熱とか、あるんですか？」

「ない」

「風邪ですか？」

「いや」

「食欲は？」

いらぬ質問ばかりしてくる沙帆子に、啓史はいい加減ぶちぎれた。

「お前な。頭が痛いんだ。これをなんとかしろよ」

額にぐっと指を差し、啓史は怒鳴りつけた。その途端、頭の中にガンガンガンという重い音が響く。

痛みのせいで涙目になりかけているというのに、沙帆子はまったく意味がわからないように、ぼかんとしている。

「手当てという言葉を知らないのか？」

「手当て……ですか？」

「患部に手を当てて癒す。さすってもらうと痛みがやわらいだような気になるものだろうか？」

啓史の説明に、沙帆子はようやく納得したように頷く。

「そうですね」

沙帆子は啓史の隣に座り、彼の額に手のひらを当ててきた。

自分でも単純すぎると思うが、啓史の望んだとおりの状況になり、気分がぐっとよくなった。

「少し熱いみたい」

「お前の手が冷たいからだ」

ほっと息をついて答える。

カップをテーブルに置き、啓史は沙帆子の手の上に自分の手を重ね、ソファに横になった。

強引に横になったために、沙帆子は啓史の身体の上に倒れ込んできた。

「せ、先生」

泡を食った表情で、彼女は手足をバタつかせる。

「世話のかかるやつ」

啓史はくすりと笑い、沙帆子の身体を抱きしめた。

## 2 腑ふに落ちない願い

ドアをノックする音が聞こえ、啓史は眉をひそめた。

沙帆子の唇を味わい始めたばかりだということに……

いったい誰だ？ まあ、見当はつくのだが……

啓史は未練に思いつつも、唇を離して起き上がった。

「はい」

「私だ」

やっぱりか……

「なんだ、伯父さんどうしたんですか？ ずいぶんと早いな」

「早く開ける」

せつつくように言うのは、この学校の校長でもある伯父の橘広勝だ。

「頭が痛くて寝てるんですよ」

苛立ちを隠さずに、むっとしたまま答える。

二日酔いで頭がズキズキしてならないのに……

伯父と会話などする気分にはとてもなれない。

「お前、いまここに、彼女がいるんだろう？ ごたごた言わんと、早く開ける」

啓史は思わず舌打ちした。

沙帆子とのキスで、このやっかいな頭痛も少しはやわらぐと思っていたのに……

もどかしさに駆られた啓史は沙帆子をぎゅっと抱きしめた。そして満ち足りるほどではないが、もう一度彼女の唇を味わい、ようやくドアを開けた。

「やっぱりいたな。沙帆子君、おはよう」

部屋の中に踏み込んできた広勝は、沙帆子の姿を目にして、まるで鬼の首を取ったかのように勝ち誇った笑みを浮かべた。

「お、おはよう、ご、ございます」

直前までのキスのせいだろう、沙帆子はかなりの動揺を見せ、ひどくうわずった声で広勝に挨拶した。そんな沙帆子の様子を見た広勝は、とげとげしい表情を啓史に向けてきた。

伯父の顔色を見て、さらに頭痛が増す。

「啓史？」

「なんですか？」

啓史はそっけなく答えた。伯父の言いたいことは、すでにわかっている。

「申し渡したことを守っていないな」

「なんのことですか？」

「しらを切るな」

「しら？？」

「ここで……そういう行為はするなと、言ったはずだぞ」

「無駄なことですよ」

「はあ？」

「やめるつもりはないってことです。ああ、もちろん、俺なりに線は引いてますから」

広勝は啓史の言葉を聞いて黙り込み、顔の表情を微妙に変えた。

自分が望む線引きと、啓史の頭にある線引きに、どれほどの差があるのか考えているのだろう。

啓史の性格を良く知っている広勝は、この甥に何を言っても無駄だと思ったようで、派手にため息をついた。

「信用していいんだな？」

「ええ」

啓史は毅然として返事をした。広勝のほっとした様子に、啓史は胸の内を堪え笑った。

「それで？ こんなに朝早くいらした、ご用件は？」

沙帆子といちゃついている現場を押さえて、自分に道德観念を説くべく、わざわざこんな早朝にやってきたわけではあるまい。机の前の椅子に座った広勝は、急に仏頂面になり、腕を組んで啓史を睨む。なんだ？

「お前の母親のことだ」

思わぬ話題に、啓史は眉を寄せた。

「母？ 母がどうかしましたか？」

「どうもこうも、うるさくてかなわんぞ」

「うるさい？」

まったく意味がわからず、啓史は首を捻った。

「電話してきて、何を言い出したかわかるか？」

広勝はそのときのことを思い出して憤りが蘇った様子だった。

「さあ。さっぱり……」

これほどまでに伯父を憤らせるとは……いったい母は、何を言ったのだ？

わざわざ啓史に直接、愚痴を言いに来たということは、自分も無関係ではないということか？

「沙帆子君の、スリーサイズを教えろと言うんだ」

沙帆子の、スリーサイズ？

ぼーっとしていた沙帆子は、自分が急に話題の中心になって驚いている。

「どういうことですか？ なんて伯父さんにそんなこと？」

「服を買ってやりたいんだろ。いや、あれはただ、女の子の服が買いたくてならないんだな」

「彼女に？ 服……？」

啓史は沙帆子に目を向けた。沙帆子は動揺しているようで、目をきよときよとさせている。

「女の子を欲しがってたからな。あいつは」

話は見えたが……

「でも、なんで伯父さんに……」

「そうだろう？ そう思うだろう？」

啓史の言葉に、広勝は我が意を得たりというように、声を荒らげる。

おかげで啓史の頭の疼きは、頂点を迎えた。

「私が腹が立ってならんのは、あいつの言い草だ」

やれやれ……

いささかトーンダウンした広勝の声に、啓史はほっとしてひと息ついた。

「お袋、なんて言ったんですか？」

啓史の問いに、広勝はそのときの会話を思い出したのか、ふてくされたような顔になった。

「兄さんは学校長なんだから、生徒のサイズくらい調べられるでしょ？ と、きたもんだ」

「それはそれは」

自分の母親の口真似をする伯父がおかしくて、啓史は笑いを堪えた。

「お前に聞けばいいんだ。なんで私が、なじられなきゃならん」

「なじられたんですか？」

「ああ。そんなもの知らんと言ったら、役に立たないだの、なんのための学校長だのと、そりゃあもう、さんざん……」

啓史は込み上げる笑いを抑え切れず、腹を抱えて笑った。おかげでまた強い頭痛にみまわれることとなったが、笑いは頭痛に勝った。沙帆子も堪えきれなかったようで、控えめに笑みを零している。

「あいつは、お前たちの赤ん坊の服すら、買い込むに違いないぞ」

笑っているふたりを睨みながら、広勝は冗談混じりの台詞を吐く。

「それも、ピンクのベビー服ばかりなんだろうな」

顔を赤くした沙帆子を見つめ、啓史はそう言葉を足した。

「笑いごとじゃないぞ。いいかふたりとも、赤ん坊は何があっても一年後にしてくれよ」

「さあ、授かりものですからね」

啓史は含みのある眼差しを沙帆子に向けた。彼の真意を理解したらしい沙帆子は、狼狽した様子で視線を逸らす。その彼女の反応に、啓史は満足した。

もちろん、啓史はいますぐに、ふたりの赤ん坊を望んでいるわけではない。子どもはまだまだ先のことでもいい。うまく結婚までこぎつけられたら、まずはふたりきりの生活を、満足するまで味わいたい。

「お前は どうして、ひとを安心させる言葉を使えんのだ？」

啓史は伯父を見つめて、眉を上げた。

「俺ができない約束はしない主義なのは、すでにご存知でしょう？」

広勝は、啓史に見せつけるようにわざとらしいため息をついた。

「昨日の話の続きをしよう」

邪魔者の伯父を見送り、ドアに鍵をかけた啓史は、沙帆子の隣に腰かけて、そう切り出した。

「はいっ？」

「逢いたかったの。とかつて、話の続きだ」

昨日は、敦から強引に飲みを誘われてしまい、沙帆子に電話をして榎原の家には行けなくなつたと伝えたのだが、その途端、沙帆子が怒って電話を切ってしまったのだ。一瞬、唾然としたが、彼女が『合コン』と口にしていたことから、自分が敦と合コンでも行くつもりなのかと疑って嫉妬していたということがわかって……口にできないほど胸に喜びが膨らんだ。

そのあと、沙帆子から電話がかかってきて……

『逢いたかったの。ごめんさい』

その言葉だけ残して、すぐに電話は切られたが……正直、衝撃が強すぎたというかしばし意識が飛んでしまった。

喜びの余韻はずっと胸に残っていて、それもまた酒を飲みすぎた一因になつたとも思える。

顔を真っ赤に染める沙帆子を見て、頭痛はまだ治まっていなかったが、啓史はさらにいい気分になつた。

「あ、あ、あれは……その……」

「俺に逢いたかつたんだろ？ ほら、俺の顔を見て言ってみろ」

頬を膨らませた沙帆子は、啓史を睨みつけてきた。

「それより先生……約束破つたくせに……覚えてろって言つたくせに……」

ぶつぶつ鬱憤混じりに呟く沙帆子は、ぷいっと顔を背ける。

「そう言えば……」

自分が沙帆子に向けて覚えてろ、と口にした経緯が頭に蘇り、啓史は眉を寄せた。卒業式の日、この野郎は、俺をシカ……

「思い出した」

むかついていたせいで、その言葉はずいぶんと不穏なものに聞こえたのだろう。顔を背けていた沙帆子が、ぎよっとしたように振り向く。

「お、思い出したって、な、何を？」

「もちろん、俺をシカトしやがったことだ」

自分で口にした『シカト』という言葉に、さらにむかつきが増した。

「この俺をシカトするなんて、生意気な真似しやがって！」

啓史は慣れた手つきで沙帆子の頬を思い切り引つ張り上げた。

「あ、たた、い、いはい、いはいへふ」

「謝罪してもらおうか？ ええ？」

「あ、あへは……て、てんていは……あほ、あほ……」

あほ？

啓史は顔を歪めて沙帆子を睨みつけた。

「阿呆だと？」

力を入れすぎたらしく、頬の痛みに耐え切れなくなった沙帆子は、啓史の胸をポカポカと叩いてきた。

「ひあふり、ひあふんへふう。ああ……は、はへへはへん」

しゃべれませんか？

沙帆子の目がやめてくれ、と訴えている。啓史はいたぶるのをやめた。

「それで？ 言い訳とやらを聞こうか？」

目に涙をためて、赤くなった頬を撫で続ける沙帆子に、啓史は言葉を促した。

「あのときの先生……近寄りがたく思えて……」

意外な言葉に、啓史は眉を上げて沙帆子を見つめた。

「俺が？ どうして？」

「昨日のスーツ……」

スーツ？

ぶつぶつと言葉を区切るような物言いに、啓史は苛立ちを感じた。

「わかるようにまとめて言え」

「だ……だから……お、大人な感じで、壁みたいな溝みたいなの、感じたってどうか」

大人？ あのスーツが？

しかし、溝を感じた？

「だから先生のこと見られなかったってどうか……」

あのスーツ姿が、彼女に互いの歳の差を強く感じさせたということか？

だがあんなスーツくらいで、そんなに近寄り難い雰囲気を与えるものか？

卒業式に着用したスーツは、教職に就くことになった折に、両親から祝いとして贈られたもの。品もよさそうだから、正装しなければならぬときに限って着ているのだ……だからといって、普段着用しているスーツと、そんなに雰囲気が違って見えるものか？

「ふーん」

いまいち納得できなかったが、啓史は表面上、納得したように頷いた。

彼は沙帆子の膝の上にあった彼女の手を掴み、やむことなくずきずきと疼く額に当たった。

「痛いんですか？」

「まあな」

啓史は安らぎを求めて、沙帆子の膝に自分の頭を載せた。

額をやさしく撫でる冷たい手のひらに、啓史は考えることをやめ、ただその心地良さに浸った。

「先生、あの、そろそろ」

その言葉によって、啓史は現実へ戻らざるを得なくなつた。

しぶしぶ起き上がり、時間を確かめてから胸の内のため息をつく。

このままずっと、沙帆子をここに置いておけたらいいのに……

そしたら、授業の合間に、この疼うずく頭を……

もちろんそんなことは不可能だ。

啓史は、荷物を手にして窓際に歩み寄る沙帆子のあとに続いた。

窓枠に手をかけた沙帆子が、ためらいがちな表情を啓史に向けてくる。

窓の外に出る手助けをしてほしいのだろうと思つたのだが、そうではなかった。

「あのお……ひとつ、お願いみたいなのがあるんですけど……」

ひどく言いにくそうに沙帆子が言い、啓史は驚いた。

こいつが俺に願ひごとつて……いったいどんな願ひなのか、ひどく興味を引かれる。

「ほお、……なんだ？」

「こ、今夜、昨日のスーツ……着て、家に来ないかなあつて……」

昨日のスーツ？

啓史は眉をひそめた。

俺があれを着てたから、近寄り難く感じてシカトしたくせに、着てこい？  
……なんだ？

さっぱり理解できないが、沙帆子は頬を赤くして、啓史が快こころよい返事をしてくれるのを待っている。

「別に……いいけど……」

「えっ、ほ、ほんとですか？ 着てきてくれるんですか？」

「それが願ひなのか？」

なんとも腑ふに落ちず、啓史は念を押すように尋ねる。

「は、はいっ」

沙帆子はひどく嬉しげに元気良く答えた。

その輝きに満ちた喜びの表情は、啓史の気分を良くした。

「まあ、さほど手間のかかることじゃないしな。快く願ひを叶えてやろう」

「あ、ありがとうございます」

ぺこぺこ頭を下げる沙帆子のように、優越感を覚えながら、啓史は口を開いた。

「それじゃあ、お返しに何をもらうか、じっくり考えるところか」

「へ、へっ？」

驚く沙帆子を前に、啓史は居丈高いたけだかに胸を張つた。



「願いを叶えてやるんだ。お返しをもらうのは、当然の権利……だろ？」  
沙帆子からもらいたいお返しをいくつか思い描きながら、啓史は沙帆子の頬をやさしく抓った。

### 3 願ってもないお楽しみ

昼食を満腹になるほど食べた啓史は、カップを手にとると、ぬるくなったコーヒーを一口飲み、ソファにもたれた。

敦の母親が持たせてくれた弁当に、沙帆子の弁当……

午前中、ガンガンと激しくドラを鳴らし続けていた頭の中も、昼になってすっかり静けさを取り戻していた。

酒は調子に乗って飲むものじゃないな。

いまさらともいえる教訓を胸に刻み、啓史は自嘲した。

頭痛も治まり、すこぶる気分がいい。だがこの気分の良さ、頭の痛みが消えたからばかりが理由ではない。次の授業が沙帆子たちのクラスだからだ。

たとえ教師と生徒としてであっても、同じ場にいられるのは嬉しい。

授業中の沙帆子の姿を見られるのも、あとわずかだ。三月を過ぎれば、そんな機会もなくなる……

啓史は宙を見つめた。

四月になっても、沙帆子は自分の側にいるだろうか？

結婚に二の足を踏み、両親とともに引越してしまったら……

いまの状況で、それは、どれほどの確率だろうか？

啓史は残っていたコーヒーを飲み干し、ひと月後の自分を想像した。

彼のいまの気持ちを反映してか、頭に思い浮かぶ状況は、しあわせからはほど遠かった。二日酔いが戻ってきたような気分の悪さを感じ、啓史は無意味な憶測に囚われていることに気づき、慥然とした。

考えても仕方のないことだ……最悪な状況を考えて落ち込むなんて、馬鹿馬鹿しいにもほどがある。

啓史は自分を叱りつけ、気分直ちに新しいコーヒーを淹れた。

予鈴が鳴り、白衣を羽織った啓史は、教材を抱えて化学室に入った。

ざわついていた生徒たちは、啓史の姿に気づいて順に口を閉じ始め、教室は静まっていた。教卓に教材を置き、さっと教室を見回した啓史は、眉をひそめた。

いくつかの席が空いている……  
誰よりもその場にいてほしい人物がいない上に、沙帆子と仲の良い、飯沢千里と江藤詩織の姿も見当たらない。  
いったい……？

あの三人に、何かあったのか？

不安に駆られていると、ドアが開き、沙帆子が姿を見せた。走ってきたらしく、少し息を弾ませている。啓史と目を合わせた彼女は、ひどく気まずそうに頭を下げた。その様子から察するに、彼女はただ単に遅刻をしたわけではないようだ。すぐにでも何があったのか話を聞きたかったが、もちろんそんなことはできるはずもない。

「榎原、遅刻だ。……早く座れ」

沙帆子は彼の言葉に従い、忙しなく自分の席に着く。

その直後、またドアが開いた。

今度は飯沢と江藤だった。

「すみません。遅刻しました」

啓史と目が合った飯沢は、沙帆子と同じように気まずそうな表情をして、江藤と揃って頭を下げた。このふたりの表情からして何かあったのは確実だ。

「飯沢、江藤、遅刻だ。授業を開始する、早く座れ」

ふたりが座ったことを確認し、啓史は授業を開始した。その間も沙帆子は何か思い悩んでいるような顔をして、ずっと俯いている。気にはなったが、授業をおろそかにするわけにはいかない。

授業を当初の予定どおり終わらせたところで、終了を知らせるチャイムが鳴った。

「佐原先生？」

教卓の上の教材を片付けていた啓史は、顔を上げた。

声をかけてきたのは、沙帆子の隣に座っている男子生徒だった。

啓史はこの機会に乗じて、沙帆子の様子を窺った。

「なんだ？」

「先生、彼女がいるって噂あるんですけど……ほんとですか？」

その問いを受けた瞬間、教室は水を打ったように静まり返り、ほとんどの生徒が啓史に注目した。

彼は思わず沙帆子に目をやった。目が合うと沙帆子は慌てて顔を伏せた。

本音を言えば、男子生徒の問いに正直に答えて、この場にいる全員をぎよつとさせてやりたかった。ここで暴露すれば、すぐに全校に広まり、広澤の問題もあっさり片がつくだらう。そうすれば、大手を振って……

俯うつむけていた顔を沙帆子がそっと上げたために、まともやふたりの目が合った。沙帆子は慌あわてふためにように視線を逸よらす。

その態度にムツとしたが、この反応も、自分を意識していればこそ、と思ひ直す。彼女どころか、結婚目前の婚約者がいると暴露して仰天させてやるか、と口を開きかけたところで江藤が大声を出した。

「プライベートな質問、先生受けつけないって言ってるじゃん！」

尋常じんじょうではない声を張り上げた江藤は、懇願こんがんするように「でしょ？ 先生」と啓史に訴える。

「そうだな」

啓史は思案して、そう答えた。

「んだよおー」

「っーまんねえー」

男子生徒たちが口々に声を上げる。

啓史は教材を抱え、最後にもう一度沙帆子を見て、教室をあとにした。

隣の部屋に戻った啓史は、壁の向こうのざわついた化学室が次第に静まってゆくのを感しながら、ソファに座った。

やれやれだ……

ほっと息をついたものの、沙帆子が授業に遅れてきた理由が気にかかる。

飯沢や江藤と、何かあったのだろうか？

今夜はなるべく早く榎原家に向向いて、沙帆子に話を聞くことにしよう。

今日の授業を終えて一段落していた啓史は、携帯の着信音を耳にし、顔を上げた。

また敦の野郎か？

今夜も飲もうなんてぬかしやがったら、首を絞めてやる！

そんな理不尽な憤いらだりを胸に、啓史は電話の相手を確かめた。

うん？ 沙帆子の母親から？

啓史は急いで電話に出た。

「はい」

「あ、啓史君。いま、いい？」

「はい。かまいませんが……」

「あなた、コスプレさせて楽しんでるみたいじゃないのお」

啓史は、美美子のやたら含みをもたせた台詞せりふに眉を寄せた。

コスプレ？ いったいなんの話だ？

「メイドのコスプレ衣装、あるんでしょ？ 沙帆子に聞いたわよ。写真、わたしにも見

せてよ」

何かとんでもない誤解が生じているようだった。美美子は、啓史が沙帆子にメイドのコスプレをさせ、しかも写真を撮って楽しんでいると思い込んでしまっているようだ。

馬鹿馬鹿しい……なんで美美子さんはこんな誤解を？

もちろん、美美子さんを誤解させるような何かがあったのだろうか……  
これって、絶対、沙帆子が絡んでるよな？

「そんな写真など、ありませんが」

そう口にしたとき、啓史は、去年の学園祭で沙帆子たちのクラスが企画したメイド喫茶のことを思い出した。

あのメイドの衣装を着た沙帆子を、俺は当然写真に収めていると、美美子さんは思ったわけか？

いや、そういうことじゃないな。

『コスプレさせて楽しんで』と美美子は口にしたのだ。

つまり……俺が個人的趣味で、あいつにメイドの服を着せて楽しんでいると……

「またまたあ。ははあん、さーては、わたしには見せられないようなポーズばかり撮ってんのね」

完璧な誤解の言葉に、啓史は眩暈めまよがした。そして沙帆子に怒りを覚えた。

メイド喫茶のことを沙帆子が美美子さんに話し、このような誤解を生んでしまったようだが……  
あんの野郎……いったい何をどう話せば、こんなことになるんだ？

むかつきが湧いてきて、顔が歪ゆがむ。

おかしい趣味の持ち主だと美美子に勘違いされているかと思うと、いたたまれない。そんな趣味はないし、そんな事実はないと言ってやりたかったが、自分がどんな弁明

をしたところで美美子さんが信じるとはとても思えない。冤罪えんざいを着せられたうえに言い逃れしようとしているなどと思われたら、歯痒はがゆすぎてどうにかなりそうだ。

啓史は自分をなだめてから、口を開いた。

「申し訳ありませんが、本当に写真には撮っていないんですよ」

苛立こたちは募つっていたが、この怒りは沙帆子に向けるべきだ。

そう、沙帆子に……

「ええーっ、そうなの？」

「はい」

「つまらないわね。ねっ、啓史君、そのコスプレ衣装、啓史君のところにあるんでしょ？」

「は？」

疑問符をつけたことに、美美子は気づかなかったようだった。

「今夜、持ってきて勉強の合間にその写真撮ってよ。もちろん幸弘（まきひろ）さんには内緒ね」  
 写真を撮れと言われても、そんな服など自分が持っているわけがない。  
 なんと答えようか考えているうちにも、美美子は言葉が続ける。

「それで、もうひとつ頼みがあるんだけど」  
 俺に頼み？

「はい。なんでしよう？」

「沙帆子と、あの子の部屋の写真を撮ってほしいの」

啓史は美美子の意図がわからず、眉を上げた。

それがもうひとつの頼み？ だいたいどうしてそんなことを俺に頼むのだ？

美美子さんが直接撮ればいいのに……幸弘さんでも……

「勉強してるところとか……ソファに座って寛いでるところとか。普通のところを……」

「あの、どうして俺に？」

「わかんない？」

くすつと笑いながら問われ、啓史は眉を寄せたが、次第に美美子の意図がわかってきた。

そうか。ずっと沙帆子が生活していた部屋の写真だから……

当たり前の風景だからこそ、自分では撮れないのだろう。

沙帆子の部屋は、引越と同時になくなる。その思いを抱えながら自分で写真を撮る

のは、辛すぎるのだろう。それでも思い出として写真に残したい。だから美美子は、啓史に頼んできたのだ。

「使い捨てカメラを用意しておくから、今夜にでもそれで撮ってちょうだい」

「使い捨てカメラですか？ デジカメ……」

どのみち沙帆子のコスプレ姿をデジカメで撮るのだから、そのついでに、と言おうと思ったが、美美子は「ええ」と口を挟み、そのまま話し続ける。

「幸弘さん、いいデジカメを持つてるんだけど……あのひとは内緒で撮ってもらいた  
 いから」

美美子の思いが伝わってきて、なんとも胸（むね）が疼く。

「わかりました」

出過ぎたことを言う必要はない。美美子さんが望むように、自分は美美子の用意した  
 使い捨てカメラで、沙帆子と彼女の部屋を撮ればいいのだ。

美美子の思い、そして幸弘の思いが、啓史の胸に迫る。それでも……沙帆子連れて  
 いかせることはできない。

ふたりが満足するような、いい写真を撮ろう。それが、ふたりのために、自分として  
 やれる唯一のことなのだろうから。

「助かるわ。啓史君、ありがとう」

「いえ」

「それと、次の日仕事だから面倒かもしれないけど、今夜はうちに泊まらない？」

「えっ？」

思いもよらない申し出に、啓史は驚いた。

「嫌？」

「いえ……嫌ということはありませんが……泊まってもいいんですか？ 幸弘さんは？」

「あのひとは気にしなくていいわ」

芙美子は軽く言うが、幸弘のことを考えると、ためらいを感じないはずがない。だが、せつかくの申し出なのだ。それに、さらにまた沙帆子との距離を縮められるかもしれない。ここは芙美子さんの厚意に甘えて、幸弘さんのことは気にせず、泊まらせてもらおうとしよう。

「それでは、泊まらせていただきます」

「そう。それじゃ、着替えやらパジャマを忘れずにね」

「はい」

話し終えた啓史は、携帯をポケットに戻し、考え込んだ。

思いがけず榎原家に泊まることになったが、これで沙帆子や彼女の部屋の写真を撮る時間に余裕がもてる。

芙美子は、そのことも考えて、啓史に今夜泊まらないかと言ったのだろう。

しかし、メイド服で撮影か……ずいぶんと面白いことになったな。

あのメイド喫茶のときに味わった苦々しさは、忘れたくても忘れられない。メイド服を着せて写真を撮れば……抱えていた憤りもおさまるかもしれない。

あらぬ誤解を受けたことに対しても、沙帆子にきつちりと罪の償いつぐなをしてもらおうじゃないか。

メイド服を突きつけられて怯えている沙帆子を想像し、啓史はにやりと笑った。

よし、こうなったらどうにかして、あれと同じようなデザインのもの入手しなければならぬ。学園祭のときに着たものを、沙帆子はまだ持っているのだろうか？ ひよっとするとあれは、レンタルだったのだろうか？

沙帆子に電話して聞いてみるか。

携帯を取り出そうとポケットに手を入れたものの、沙帆子にコスプレ写真を撮るなんて言ったら、嫌がるに決まっている。まだ持っていたとしても、処分したと嘘をつくかもしれない。

だいたい、コスプレ写真なんてものを撮ることになった経緯を説明するのも面倒だ。

となれば、どこかでメイド服を手に入れて、有無を言わず着せて撮る。これが一番てっとり早いな。

眉を寄せて策を講じていた啓史は、ようやく片棒かたぼうを担いでくれそうな、ある人物を思いついた。親友の時田ときただ。時田はデパートに勤務している。デパートというのは様々な店があるし、メイド服だっけと手に入れられるだろう。

啓史はすぐに時田に電話をかけた。

「時田、佐原だけど」

「うへっ、珍しいな。お前から電話してくるなんてよ」

「いま仕事中か？ 電話、大丈夫か？」

「仕事中なら電話に出てねえさ。ちょうど休憩入ろうと思って、裏に回ったとこだ。それでなんだ、週末飲もうってか？」

「いや、ちょっと相談に乗ってもらいたいことがあって電話したんだ」

「お前が俺に？ へーっ、なんだよ？」

「ちょっと手に入れたいものがあったな」

もちろんメイド服が欲しいのだが、なんとも口にしづらい。

「ふーん。……で、手に入れたいのって？」

啓史が返事をしなかったため、時田は答えを催促してきた。

何が欲しいか伝えないことには、相談に乗ってもらえない。啓史は、重い口を開いた。

「その……ウエイトレスとか……メイドとか……そんなような服を売ってるところある

か？」

なんとか言葉をごしつつも伝えようと試みる。

「はあ？ ウエイトレスとかメイドの服？ そんなもの、お前何すんだ？ そんなもん

が……はっはーん」

時田は急に、ひらめいたような口ぶりになる。

「出し物なんか、生徒がするんだな？」

啓史は、時田の勝手な推測に便乗しておくことにした。

そのほうが都合が良い。

「まあな、それであるのか？」

「ウエイトレスかあ、制服ってえと、学生服売場ならあるんだが……おっ、そうそう、ぱちりなとこがあったあつた」

「どこら辺にある？」

啓史は、時田が勤務しているデパート内を思い描きながら尋ねた。

「俺が案内してやるよ」

その申し出に、啓史は眉を上げた。そうしてもらえたら助かるが……

「いいのか？」

「休憩一時間あるからな。それでいつ来る？」

さっと時計に目を向け、時刻を確認する。

帰る前に、職員室に寄って用事を済ませなきゃならないからな……

「そうだな。あと二十分くらいで学校を出る」

「へっ？　なんだよ、これから来んのか？　ずいぶん急だな」

「なんだ、今日は無理なのか？」

「いや、そんなことはない。今日とは思ってなかったら、びっくりしただけさ」

「それじゃ、どこで落ち合う？」

「南側の正面入り口かな。着いたらもう一度電話くれ」

「了解、それじゃあとで」

啓史はさっそく用事を済ませるべく、部屋を出た。

#### 4 気になる思惑

時田の職場であるデパートまでの道は渋滞していて、到着するのに思っていたより時間がかかってしまった。地下の駐車場に車を停めた啓史は、エレベーターで一階に上がり、時田の指定した南側の正面入り口に向かった。

「佐原！」

待ち合わせ場所に辿り着く前に、啓史は時田に後ろから肩を叩かれた。

「よお」

ごく短い挨拶を済ませた時田は啓史の正面に立ち、どうしたというのか、全身をじろじろ眺め回してきた。

「なんだ？　この服装に文句でもあんのか？」

時田は、面白く無さそうな顔で首を横に振る。

「相変わらず、嫌味なほどかつこいいなお前。教師なんてやってるくせによ。イケメン俳優並の姿で校内闊歩してちゃ、いけねえなあ」

啓史は時田の頭を軽くひっぱっていた。

「いてっ」

「売場はどこだ？」

「チッ！　相変わらず、つまんねえやつ。こっち」

「なんだ、外に出るのか？」

「おう。お前のお望みの店は、残念ながらこのデパートにはないんでな」  
にやにや笑っている時田を訝しく思ったものの、啓史はおとなしくついていった。



「ここか？」

デパートから歩いて三分ほど、その独特な店を前にして、啓史は思わずたじろいだ。ものすごく入りづらい雰囲気だ。

「おお。ここならお望みの制服、なんでも揃うぞ。っていうかお前、ウエイトレスとかメイドとか曖昧なこと言ってたけど……結局どっちなんだよ？」

「あ……メイドっぽいやつ……かな」

しぶしぶ答えると、時田はにやにやとした笑みを返す。

「時田、お前、なんでこんな店知ってるんだ？」

啓史はさっさと話題を変えた。

「通りすがりに、こんな店あんだなあって見てただけだ。ほれ、さっさと入ろうぜ。ああ、言っとくけど、休憩時間が過ぎちまいそうになったら、俺、先に戻るからな」

店に入りながら時田が言い、啓史は顔を歪めた。

これはもたもたしてられない。こんな店に、ひとり置き去りにされては堪らない。

「これなんか、いいんじゃない？ すっげえ、可愛いぞ」

白とピンクの丈の長いドレスを指差して、時田が言う。

「そんなのじゃないぞ」

「ああ、メイドだっけか？ どこにあるかなあ？」

にやけ顔で店内を眺め回しながら、時田はずかずかと進んでいく。

俺は腰がひけてるつてのに、時田の野郎、度胸があるな。

面白くない気分になりながらも、啓史は時田のあとに続いた。

「いらっしやい、まっせえ〜」

ぎよっとするほどゴテゴテの服を着た女の子が、時田に愛想よく声をかけた。

どうやら、この店の店員のようだが、はた目にはとてもそうは見えない。

「どんな服がご入用ですかあ？」

「メイドっぽい制服が欲しいんだけど」

にやけ顔の時田は、店員の姿をじろじろと上から下まで眺めながら言う。正直、その顔をぶん殴ってやりたい。

「メイドですかあ。色とかご希望はありますかあ？」

時田は啓史のほうを見て、どうなんだ、と見つめてくる。

そのせいで、店員の目もまた啓史に向けられた。

「佐原、色は？ 何色がいいんだ？」

わざわざ繰り返してくれなくても、聞こえているのだが……

「紺」

「紺だつて」

啓史の言葉は店員にも届いているだろうが、時田は律儀にも伝達してくれる。  
「あちらのお客様が、ご入用なのですか？」

「ああ、そう」

時田がそう言った途端、店員は時田を退けるようにして、いそいそと啓史のところまで歩み寄ってきた。

どぎつい化粧がバケ子女史を彷彿とさせ、思わず逃げたくなる。

時田を介して会話できたほうがありがたかったのだが……

「他にも何かご要望とかはございますかあ？」

店員らしからぬ甘ったれた口調に、いい印象は持てなかった。だが店員に不満を抱いている場合じゃない。さつさと買わないと、こんな場所に、ひとり置き去りにされてしまう。

「そうだな……」

啓史は視線を上に向け、沙幌子が着ていたメイド服を思い出してみる。

「紺色のスカートに白いエプロン、白いブラウスにリボンのついたやつとかつてあるかな？」

「はい。もちろんございますよ。こちらです」

店員についてくるように促され、啓史は時田のほうを見て、一緒にいていい、と顎

で示した。

「ちえっ」

何が気に入らないのか、時田は不服そうに頬を膨らませつつ、ついてくる。

「このあたりが、だいたいお客様のご要望を満たしていると思えますが、いかがですか？」

啓史はぶら下がっているいくつかの服のデザインを見てみた。が、どれもこれもスカートが短すぎる。

「もっと丈の長いのはないのか？」

「丈の長いのですか。そうですね……こんなのでしたら、長いのもありますけど……」

店員が取り出した服は、確かにスカートは長いが、まったくイメージが違う。

仕方なく、啓史は丈の短いデザインのものの中から、沙幌子が着ていたものに一番近いと思えるメイド服を選び、店員に渡した。

「これでいい、これをくれ」

「はい。かしこまりました。あと、靴下、パニエ、カチューシャなどは、よろしかったですか？」

靴下はわかったが、パニエやカチューシャがどんなものなのか想像もできない。

この服だけで事足りるんじゃないのか？ まあいいか。また買いに来なきゃいけないとなったら、堪らないしな。

「必要そうなもの、君、適当に選んでくれ」

「はい。承知致しましたあ」

店員は明るく言うと、レジに行くまでに、彼には何やらわからないものをあれこれ手に取っていく。

たぶん、あれらの中にパニエとかいうものが含まれているのだろうか……

「なあ、これ着た生徒の写真を撮るんだろ？」

期待に胸を膨らませている時田を、啓史はじっと見つめた。

なんで写真を撮ると決めつけているのだ。

「着るのって、可愛い子なのか？ 写真、俺にも一枚くれよ。なっ、なっ」

啓史は時田を凄みのある目で睨みつけた。

なんでこいつに沙帆子の写真を……誰がやるかってんだ！

もちろん、時田はこの服を着るのが、沙帆子と知っているわけではない。生徒のうちのひとりだと思いついてるからだとかわかっていても……それでも……

むかつく……

「お前、彼女いるだろ。なんで他の女の写真なんか欲しがる？ 馬鹿じゃないのか」

「ちえっ、まったく、男のくせに、男心がわからねえやつだな。呆れるぜ。それにしても、このメイド服使って、どんな出し物やるんだ？」

「写真撮影だ」

「はあ〜ん」

わかったようなわからないような返事をする時田に、啓史は笑いを嘸み殺す。

メイド服はそれなりの値段だったが、今夜のお楽しみを考えればさして高い買い物とは感じなかった。

今日の礼に、次回の飲み会は奢ると約束し、デパートに戻ったところで時田と別れた。自宅のマンションに戻り、急いでシャワーを浴び、カジュアルな服に着替える。そして、泊まりの準備をして部屋を出たが、車に乗り込んだところで沙帆子のお断りを思い出し、仕方なく引き返した。

スーツなんてもの、なんでいまさら着てほしがるのか、さっぱり意味がわからない……

## 5 駆け引き

両手に荷物をぶら下げた啓史が、榎原家の玄関のチャイムを鳴らすと、ドアがパツと開いた。顔をのぞかせた沙帆子は、一瞬嬉しそうな笑みを浮かべたが、啓史の格好を見た途端、がっくりと肩を落とした。

なんだ？ こいつ、なんで、俺を見てがっかりしてんだ？

「先生、約束はどうなったんですか？」

責めるように頬を膨らませて言われ、啓史はそういえばそうだった、と思いついた。スーツを着て家に来てと言われてたんだ。がっかりしたのは、約束していたスーツを着ていなかったかららしい。そうとわかって、むかつきかけていた気分がスーツと静まる。

「ほら」

スーツの入った袋を沙帆子に差し出す。袋を受け取った彼女は、すぐに中身を確かめた。啓史は、美美子がいるであろう居間を窺いながら、沙帆子に顔を寄せた。

「そんなもの着ては来られないだろ。お前の部屋に入れとけ。お前の頑張り次第で、着てやろう」

たっぷり恩を売るように小声で囁く。

「先生、それ……は、白衣ですか？」

啓史は眉をひそめた。

沙帆子の視線は、啓史が持っているもうひとつの紙袋に向けられている。

「はあ？」

白衣？ ……なんだ白衣ってのは？

「そんなもの持つてくるわけないだろ」

沙帆子はなぜかわからないが、ひどく焦っている。

「そ、そうですね。も、もーちろんですよ」

おかしな沙帆子の態度を気にしながらも、啓史は靴を脱いだ。

美美子さんはどうしたのさ？ いつもだったら、すぐに顔を出してくれるのに……夕食の準備で手が離せないのか？

沙帆子が、啓史の渡した袋を抱えて自分の部屋に入ってしまったのを横目に、啓史は美美子に挨拶をするために居間へ向かった。だが美美子の姿は見当たらず、キッチンにもいない。

居間の隅に荷物を置いた啓史は、テーブルの上に、美美子の言っていた使い捨てカメラがあるのに気づいた。

今夜の、撮影用か……

つい笑いが込み上げる。何も知らない沙帆子は、びつくり仰天するに違いない。啓史はメイド服の入った袋を手を持ち、沙帆子の部屋に向かった。

部屋のドアが開けっ放しになっており、啓史は中を窺った。

沙帆子は机の側に立ち、何やら考え込んでいる。

「おい」

呼びかけると、なぜかぎよっとしたように飛び上がった。

「な、なんですか？」

「美美子さんはどうした？」

「いないんです」

沙帆子の言葉に戸惑い、「いない？」と聞き返してしまった。

「はい。家に帰ってきたら、ドアに……」

沙帆子はそう言いながら、自分の机に歩み寄った。そして、何やら紙を取り上げて啓史のほうに向き直ると、それを広げて見せる。

「こんなのが貼り付けてあったんですよ」

紙に書かれた大きな文字に思わず面食らう。

「なんだ？ 持ってなければ、大家に行け？」

「そうなんです。それでこれがおやつの下に敷いてあって……」

沙帆子は、さらにもう一枚、紙を広げて見せた。

『勉強もしなさいよ！』と書いてある。どうやら美美子はどこかに出かけたらしい。

それにしても、毎度のことだが美美子の行動には驚かされる。

どうにも笑いが込み上げてきて、啓史は声を潜めて笑った。

しかし、どこに行くのか行き先を書いておくべきだと思うのだが……

「先生、これがそんなにおかしいですか？」

「いや、そういうことなら、俺たちは俺たちで楽しむかと思ってな」

意味ありげに言いながら、沙帆子に向かってにやりと笑う。

「た、楽しむって？」

言葉に含めた意味を意識しながらも、すっとほけたフリをして焦っている沙帆子が愉快でならない。もっとからかってやりたくなる。

「もちろん」

「も、もちろん？」

啓史はベッドの上に沙帆子を押し倒し、顔を近づけた。啓史の強引なふるまいにかなりぎよっとしたようだったが、沙帆子は身体を固くして目を瞑っている。唇を近づけたが、啓史はその寸前でやめ、頬に軽く触れただけで身を起こした。沙帆子が目を開ける。その眼差しは「どうして？」と言っている。

もちろん自分だってキスしなかった。だが、キスの寸前で、先ほど見た使い捨てカメラが脳裏に浮かんで……

あのカメラの持つ意味……美美子の思い、幸弘の思い……あと少しでなくなるはずの……この部屋……

それらが頭の中を駆け巡ってしまい、キスすることができなかつた。

思いがあってやりたい放題に振る舞っていたら、自分を応援してくれている、幸運の女神の怒りを買いたいような気がしたのだ。

らしくもなく色々考えてしまつて、キスができなかった腹いせに、啓史はベッドに押し倒されたままの姿勢でいる沙帆子を力任せに持ち上げた。

「な、な、何するんですか？」

「もちろん」

そう言つてから、彼女を机の前の椅子に座らせる。

「勉強に決まつてる。さあ、最低三十番は、成績上げてもらうぞ。俺の名譽がかかつてるからな」

「め、名譽つて、なんなんですかあ？」

「この俺が家庭教師してやつてんのに、成果がまるでなしなんてこと、許せるか。いいか、血反吐を吐くほど勉強に打ち込めよ」

実のところ、名譽がどうかという脅しは、この場の雰囲気を変えるための方便だ。もちろん、それなりの結果を出してやりたいと思つている。これでも教師だ。それに弟である順平の勉強を見てやつていたこともある。

沙帆子は机にかじりついて勉強を始めたが、その背中からは啓史に対する不満がありありと感じられる。

「ここは「喝して、もっと勉強に集中させるべきだろう。」

「おい！」

「は、は、はいっ！」

脅しを込めて呼びかけると、沙帆子は面白いほど驚いて返事をする。

「しつかりやらないと、今夜のお楽しみ時間は、無に帰するぞ」

なんのことを言っているのかぴんとこないらしい沙帆子を見て、啓史はスーツの入った紙袋を取り上げ、机の上に置く。

「これだ。着てほしいんだろ？」

沙帆子は黙り込んでしまつたが、上から紙袋の中を覗き込んでいる沙帆子の唇が、突き出たり引つ込んだりしている。

それを愉快な気分で眺めていると、沙帆子が「ほしいです」と、しぶしぶ答えた。思わず噴き出しそうになり、啓史は慌てて自分の口を押さえた。

沙帆子のために数学の例題を作り終えた啓史は、手にしていたペンを転がして、顔を上げた。沙帆子を見ると、まだまだ集中しているようだ。

それにしても、芙美子さんはいつたいどうしたのだろう？

幸弘さんもそろそろ帰ってくる時間だ……

美美子さんの携帯に電話してみるか？  
 そう考えながら啓史は沙帆子に目を向けた。集中しているところを邪魔したくはないが……

「美美子さん、遅いな」

沙帆子が顔を上げ、こちらを振り返る。

「言うの忘れてました。どうもパパとママ、デートじゃないかなって感じなんです」

啓史は面食らった。

「デート？」

「夕食の準備がしてあって……ふたりぶんの。だから……」

「そうなのか。いま七時だな」

「先生、夕ご飯食べませんか？ 美味しそうなビーフシチューができてましたよ」

「ほお、いいな。食べるか？」

「はい」

沙帆子は嬉しそうに答え、いそいそと椅子から立ち上がる。どうやらいい加減、勉強に飽きていたらしい。

それにしても、幸弘さんと美美子さんがデートとは……

今夜、自分に泊まっていけと言ったのは、帰りが遅くなるからなのか？

ああ、もしかすると……幸弘さんがいない間なら、安心して部屋の写真やらコスプレの写真が撮れると考えて？

だがそれなら、前もって帰る時間を教えておいてほしかった。いつ帰ってくるかわからないのでは、安心してられない。

沙帆子がキッチンに向かってから、啓史は携帯を取り出した。

美美子に電話をかけたが通じない。いまだどこにいるのか、何時に帰るつもりなのか聞こうと思ったのに、『電源が入っておりません』などと、自動音声が流れるばかり。

行き先をはっきりと伝えなかったのは、面白がってそうしているだけなんだろうか？

美美子の目論見がさっぱりわからず、啓史はひどく苛ついた。

## 6 苦味を含んだ言葉

沙帆子の苦手らしい箇所をピックアップして、用紙に書き込み終わった啓史は居間に向かった。

食卓の上には、すでにあらかたの夕食の準備ができていた。

「何かやることないか？」